



「さわやかな風とともに」N・N（兵庫県）

「今日は暑かったね」

まだよちよち歩きの子どもが入口をまたぐのを確認してドアを閉める。玄関に座らせて靴を脱がせようとする、突然、チャイムが鳴った。

「すみません」

閉めたばかりのドアの向こうで、男性の声がした。何だろう、そろそろとドアを開ける。すると、帽子を手にした作業着の若い男性が立っていた。

「あの、突然申し訳ございません。僕、毎週この辺りに農産物の配達に来ているものです」

「はあ」

訪問販売の類かもしれない。

昔から、訪問販売はちよつと怖いものだという先入観がある。いつもはどんな訪問販売でも必ずドアを開けることなくインターフォンでお断りしている。帰ったばかりだったので、ついドアを開けたことを後悔する。それに、インターフォンの横





には確か「訪問販売お断り」と書いたメモを貼っておいたはずなのに。

「すみません。ちよつとだけドアを開けて待っていてくれませんか」

男性は突然きびすを返して走った。男性の丁寧で、申し訳なきような様子が、今のうちにドアを閉めてしまおうという気持ちをなぜか押し止める。彼は、少し先に止めていたトラックの荷台から、何かを取り出して急いでこちらに駆けてきた。

「もし、よろしければなんですけど。これ、食べてみてもらえませんか」

男性が差し出したのは、卵と豆腐と野菜だった。

「僕たちの作っている自信作なんです」

包装されていない土のついた野菜は青々としていて、卵には小さな藁さえついている。

「まったくくってわけにはいきませんが、農薬は極力使っていません。卵だって、生みたてのものをいち早くお届けしています」

汗を拭きながら説明する彼は、日に焼けていて、目尻のしわが何をも包み込むような優しさをたたえている。

はい、と彼は私にそれらを手渡した。とっさに受け取る。その時、子どもが抱つ





こ抱つことぐずり始めた。手渡された農産物を玄関に置くと、私は子どもを抱きかかえた。

「ぼく、よしよし」

彼が子どもの頭を撫でながら、さつきより、いつそう顔をくしゃくしゃにして笑う。

「すみません。突然お伺いして。実はさつき、子どもさんと家に入っていていかれるのをお見かけして。訪問販売お断りのシール、貼っておられたのはわかっていたんですけど」

「そうだったんですか」

「ええ。僕も家に、おなじくらいの子がいました。子どもさんをお見かけして、どうしても体に良い、安全なものを食べていただきたいと思って」

人見知りのひどい子どもが、なぜか彼が近づいても泣かなかった。

「気に入っていただけたら、毎週この辺りにいますので、声をかけてください。申込書を持っていますので」

本当に気に入っていただけたらいいですから、と彼は済まなそうに付け加えた。





そして、一礼をして去って行った。

訪問販売らしからぬ彼の親しみやすく礼儀正しい姿に、さわやかな風が吹いたような気がした。なんだかその日は心が浮き立った。太陽をいっぱい浴びた野菜、新鮮な卵や豆腐。どれもほったが落ちそうにおいしい。素朴さが、すべてをいっそうきらびやかに魅せることだってあるのだ、と思える。

こんな素敵な、笑顔の訪問販売ってあるんだ。目から鱗が落ちた。

「訪問販売お断り」のシールを丁寧に剥がしている自分に気がついたのは、それからほどなくしてのことだった。

【平成二七年度・佳作】

